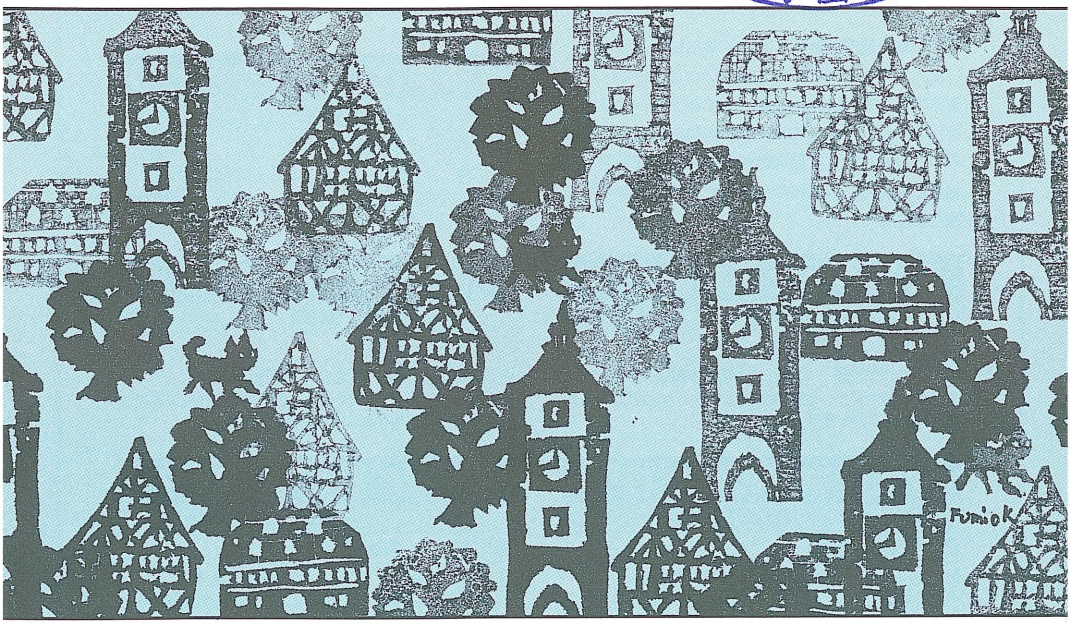
幼児の教育　第90巻　第８号　平成３年８月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ＩＳＳＮ0289－0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

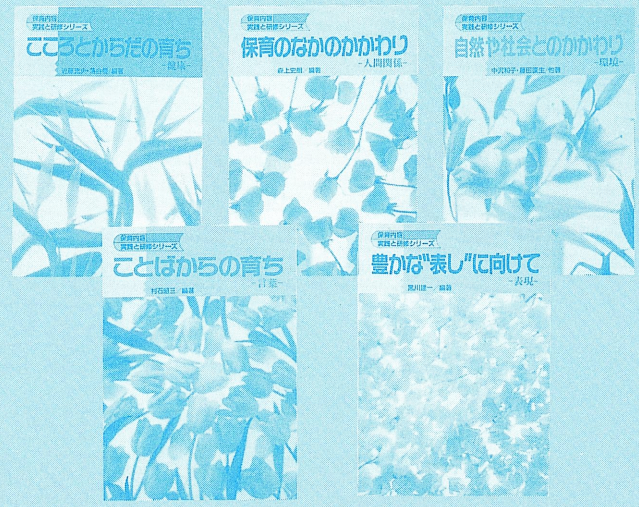
1991 8

お茶の水女子大学
平成
-3. 7. 10
受贈
附属図書館



第90巻　第８号　日本幼稚園協会

保育内容 実践と研修シリーズ



新しい幼稚園教育要領を実践するにはどうしたらいいか。単なる語句の解釈や解説にとどまらず、教育要領の基本を踏まえた実践例やエピソードを多く例として示しながら、これからの保育の実践の方向を示すシリーズです。保育者養成校の学生はもちろん、現場の先生方にも実践や研修のための懇切な手引き書となります。

自然や社会とのかかわり
—環境—

中沢和子／藤田復生 他・著

B5判　208頁　定価1,800円（税込み）

園環境の考え方と設定、子どもと自然や社会とのかかわりのあり方をたくさんの具体例を通して示します。

こころとからだの育ち
—健康—

近藤充夫／落合 優・編著

B5判　208頁　定価1,800円（税込み）

子どもが園で安定して活動できる条件と援助の方法をたくさんの例で示します。

ことばからの育ち
—言葉—

村石昭三・編著

B5判　208頁　定価1,800円（税込み）

豊かな感性とイメージを培い、自分の言葉を育てる言葉指導のあり方を具体的に示します。

保育のなかのかかわり
—人間関係—

森上史朗・編著

B5判　208頁　定価1,800円（税込み）

今と未来を生きるための人とのかかわりをどう考えどう援助していくか、そのポイントを示します。

豊かな"表し"に向けて
—表現—

黒川建一・編著

B5判　208頁　定価1,800円（税込み）

新しい幼児の「表現」とは何か。たくさんの具体例を示して総合的な見方と指導を位置づけています。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第90巻　第８号

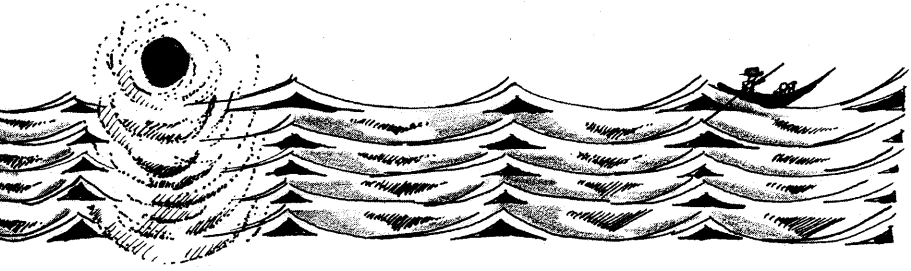
幼児の教育

――第九十巻　第八号――

目　次

写真・子供讃歌……（4）
〈巻頭言〉「子どものあとについていく保育」とは？……黒田　成子…（6）
朝の集まりがなくなるまで……津守　真…（8）
附属幼稚園の教育(5)……村石　京…（14）
緑蔭図書紹介
『親って何だろう』他……中村　妙子…（18）
『症状としての学校言説』他……無藤　隆…（22）
『食べることの思想』……森下みさ子…（25）
『ベルリンの幼年時代』……彌永　信美…（28）

© 1991
日本幼稚園協会

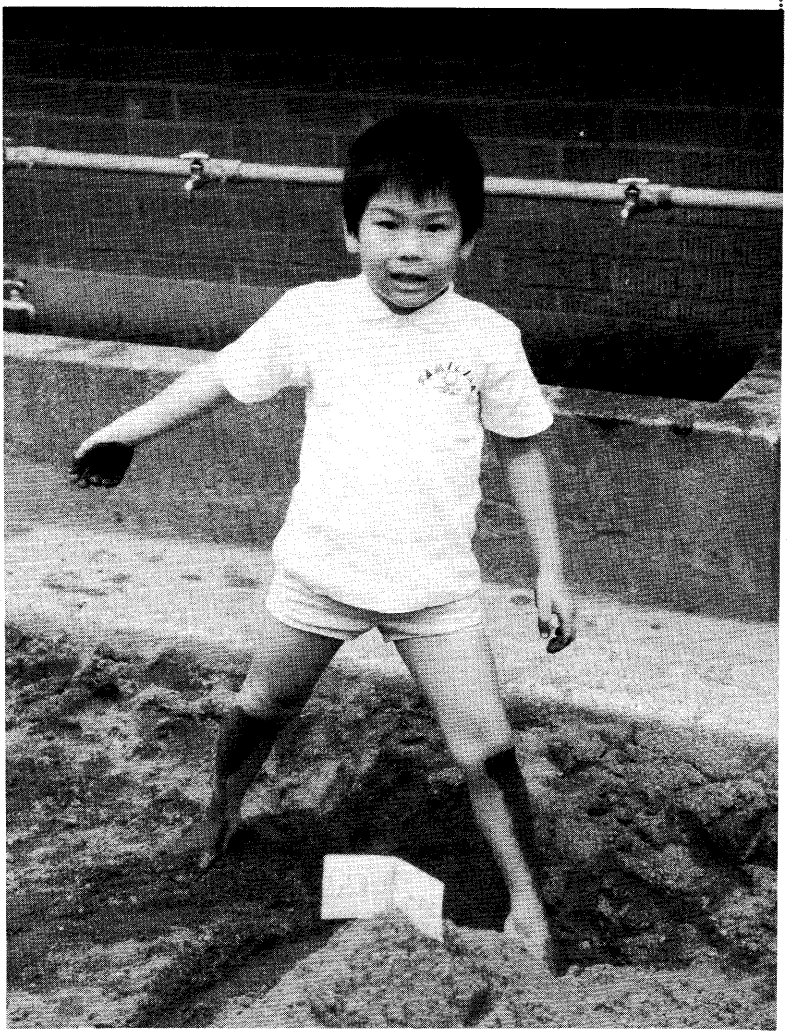


『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』……田代　和美…（33）
『静かな生活』……中村　弓子…（36）
『たのしく　たのしく　絵を描こう』……林　健造…（40）
『あかちゃんの本箱』……永田　桂子…（43）
絵本の世界(4)
ジョン・バーニンガムの魅力1……高原　典子…（46）
ある日の育児日記から(8)……佐藤　和代…（55）
若いお母さんたちへ
祐子三歳　独立のイメージ……小薗江幸子…（56）

表紙版画・樫村　文夫
扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／豊田　一秀・吉岡　晶子
編集部・大沢　啓子

子　供　讃　歌

撮影・平野　清



額に汗するということは、大人の実生活に於て、勤労を礼讃する言葉である。子どもの遊戯生活が大人の実生活と同じ貴さをもつとすれば、子どもの汗も同じ貴さをもつものである。

倉橋惣三

『育ての心』より

〈巻頭言〉

「子どものあとについていく保育」とは？

黒田　成子

昨年筆者の関係しているM園で長年つゞけてきた遊びのカリキュラムについて、その実践報告ともいえる小冊誌をまとめた。皆でその題名を考えていた時、一人の教諭が「あとについていく……」はどうかとつぶやいた。そこから始まり、長い話し合いの末、けっきょく「子どものあとについていく保育」という題におさまった。聞きなれない題名ではあるが、遊びを中心とする小園の保育観が表れている感じもして、皆で何となく気に入っていた。

ところが日を経るにつれ、これは大変な題名をつけたものだと考え込むようになった。わたし達はゆめゆめ子どもがやりたい放題のことをするにまかせ、そのあとを保育者がついていくという単純な発想をしていたわけではなかった。

しかし、かりに十年、二十年前の保育を省み、遊びの保育がかなり進んできた近年においても、子どもに則し過ぎることがあったのではないかと反省している。出来あがった小冊誌について何人かの方から題名の「子どものあとについていく保育」の真意を問われた。また、いつも助言を頂いているO教授からは「ほんとうの教育とは……同時に両端的、両面的でなければならない……」というフレーベルの言葉を引用して、考えさせられるコメントをいただいた。

そこで久々にフレーベルを思い出し、彼の名著『人間の教育』をとり出してみた。且てはその難解な文章に辟易（へきえき）したものだが、今は現場の子どもたちの姿を思い浮かべながら、いつのまにか読み耽ける

日々がつゞいた。

フレーベルの「……教育はすなわち与え、かつ取る……命令しかつ追随する、能動的であり、かつ受動的である……」のことばはいかにも教育の両面性を並列的に強調しているような感じにとられ易い。しかし他のところでは教育は「規定的、命令的であるよりも、遥かに多く受動的、追随的でなければならない」（『人間の教育』荒井武訳　岩波書店）と述べている。彼は子どもの本性が正しく発揮されるためには命令的教育を少しは認めていると思われる。たとえ子どもに命令的なことばをかけるにしても、両面的であるということは子どもが内面的方向から見られていることが前提にあって初めて考えられることだろう。

フレーベルは次の二つの場合には命令的、干渉的教育の必要を認めている。すなわち、明晰な思想や2×2＝4というような法則的な真理、あるいは永い間社会の中で承認されてきた道徳的また文化的なものに関する問題がおきた場合のみである。

そこで本園のコーナー保育のことを思い出した。コーナーは子どもが主役となって自分から出てきた考えで過ごせる場である。このような環境で子どもたちは様々な経験をくり返しつつ精いっぱい生きていく。保育者は子どもを尊重しながら一人ひとりとことばを交わし、楽しんだり、たしなめたり、見守りつつ共に育つ。この全面的な受容があり、さらに濃やかな援助があれば子どもたちの育ちはいっそう高められていく。このようなコーナー保育でこそ両面性の保育が可能ではないかと思う。それには当然意識的かつ柔軟なカリキュラムが必要である。

「子どものあとについていく保育」は両端的教育へのより深い問いをもって、新しい課題としてわれわれの前におかれていることをあらためて感じた。

（相愛学園）

朝の集まりがなくなるまで

津守　真

ゆっくりと過ごす中から生まれる子どもの行為

大人が子どもとゆっくりと過ごすとき、子どもが自分からしはじめる行為には、その子にとってたいせつなものが含まれていることを、私は繰り返し述べてきた。

八年前に、私が保育の実践の場で毎日を過ごすようになった第一日目に、入園したばかりのH夫とゆっくり過ごしたときのことを、私は「生命的応答がなされるまでの細やかな配慮」と題して記した。（拙著、『子どもの世界をどうみるか』NHKブックスP123－126）H夫は砂場に電車や自動車を持ちこんで遊んだ。H夫にとってそれがどういう意味をもつのか、「第一日目にはその後のことはまだかくされたままである」と私は結んだ。H夫はその後三年間を幼稚園に通い、父親の転勤と共に米国の養護学校に移った。その間の多くのことを考え合わせると、この第一日目にゆっくりと過ごしたことがその後の生活にとっ

ても基盤になっていると言ってよいように思う。

第二日目に学校にきたとき、H夫はすぐに砂場にきて、自動車を自分の手で動かした。たいしたことをするのでなく、ほんの少し動かすだけだが、だれにも邪魔されずに自分でやれるのがうれしいみたいだった。私も母もただ傍で見ているだけだったが、静かな落ち着いた空気が私共の間にあり、H夫は自分のペースで長い時間砂場にいた。小雨が降る寒い日で、室内に誘ったが応ぜず、次第にH夫は私の膝にのってきた。何かのチャンスにH夫が「ヤンマ」というので、私もやんまと言うとケラケラ笑う。何度も繰り返して笑い合った。ゆっくり過ごすというのは、子どものあるがままを承認し、そのときを一緒にたのしむことである。そういう関係そのものに意味があるが、その中から生み出される行為には、その子の本質があらわれているので、省察に価する。

H夫が自動車に向かい合うとき、H夫の心はそれに魅きつけられ、愛着を感じている。それは単なる物体ではない。H夫の心の奥がそこに結びつけられている。そう考えるとき、自動車はH夫の分身である。自分自身の一部とも言える物をいじりまわし、操作することによって、人は自分が何であるかを次第に知るのではないだろうか。父親が運転し運んでくれる自動車、弟たちにじきに取り上げられる自動車を、自分のやり方で自分が思うようにいじるときに、子どもの心にはいろいろの思いが湧いているのではないだろうか。H夫にとって、自動車のもつ意味は、私がつき合った三年の間にも変化してゆく。自動車を通して、H夫は自己の探究を試みている。

子どもとゆっくりと過ごせないとき

保育の実践の場には、子どもとゆっくりと過ごせない状況もたくさんある。そのことをも私はこの八年間に経験してきた。そういう状況をどう生きるかということも保育者の課題である。

次々に新しい子どもが登園する四月には、どの子どもも保育者とのゆっくりとした関係を求めているのに、大人はそれにこたえられない。子どもも親も期待がはずれたり不満が残り、保育者はその対応に悩む。新しい子どもだけではない。以前からいる子どもも、担任がかわり、クラスの部屋もかわる。その環境の変化に戸惑う子どもも少なくない。ゆっくりと過ごした体験を積んできた子どもでも、状況の変化に遭遇して、心を乱される。その変化がマイナスにはたらかないようにするために、更にきめこまかな保育を必要とする。状況の変化は一生涯ついてまわるのであって、幼少期にその時期を、保育する大人と一緒に過ごし、乗りこえることによって、子どもの自我は強くされてゆく。

ゆっくりと過ごす時間をつくることが困難な状況にも、その時間の大切なことを認識し、少しずつその時をつくってゆくとき、何週間かの間には、大人も子どもも落ち着いてくる。時間のかかることである。毎年、四月は大人も子どもも大変である。このことは学校だけでなく、就職、転勤、退職などが四月に多いことを考えると、四月は家族全体が不安定になる時期である。

幼児期と児童期

私の学校では、何年か以前まで、小学部のクラスでは、朝十時ころに集まって体操をしていた。幼児期の数年間をゆっくりと過ごしてきた子どもたちだから、小学校の時期になればこういう日課もあっていいのだろうと、最初私も思った。

ところが朝の体操の場面に参加したとき、私にはいろいろの疑問が湧いた。何よりも子どもとゆっくりと過ごす関係にならない。子どもたちは集められ、名前を呼ばれ、体操をする。養護学校だからクラスは十人位だが、できない子には大人が後ろについて手を振らせたり、皆でピアノに合わせて手をつないで歩かせる。そういうときには、大人と子どもとはゆっくりつき合うというよりも、手本に合わせてやらせる関係になる。子どもによっては、ねそべったり、部屋の外にとび出す。そういう子の手を引いて立ち上がらせ、ひきもどすのはひと苦労である。ゆっくりと一緒に過ごすときには、大人と子どもとは対等の立場に立ってやりとりをするのだが、体操のときには大人と子どもとの間は断ち切られて、支配服従の関係になりがちである。そして、体操が終わり、さあ好きなことをしていらっしゃいと言われても、子どもは本当には自分の活動をしない。四十分か一時間したら昼食になることが分かっているから、思い切った活動ができない。そういうところに私が入っていっても、子どもはゆっくりと遊ばないように思えた。

ひとりの子どもは、体操の最中に、廊下から職員室に通じる扉の鍵をあけて職員室にゆ

きたがった。私はその子を体操の場にとどめるのは意味がないと思い、その子と一緒に校長室にいった。その子はソファの上で何度も跳びはね、私の顔を見て笑った。その子はよく高い所に上がり、遠くの方を眺める目つきをするのだが、校長室のソファにいるときには、次の時の何かを追うのではなく、そのときをゆっくりとたのしんだ。

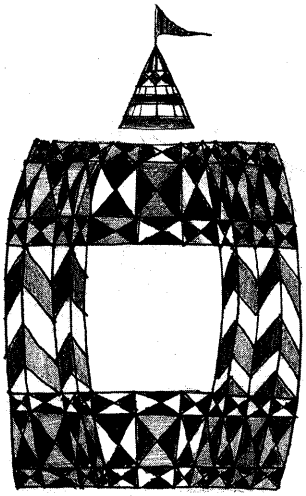
私の学校の朝の集まりと体操は、いつのまにかやらなくなった。そうなると子どもが活動に取り組む意気込みが違うのがはっきり分かる。ある子どもは、朝、自分がやりはじめたことを、昼までやりつづける。大人の観点からの活動内容の価値は別として、最後までやり遂げようとする子どもの活力と探究心はだれにも劣らない。

ある子どもは、大人が個別にさそい、粘土や手仕事をするが、大人との関係の中で子ども自身がそれを展開してゆけることを分かっているから、子どもの顔は輝いている。最近では高学年のクラスが一緒に地域の文化会館まで手仕事をしにゆくが、みんなそこで何かをやろうと思っているから、皆で一緒に行動しても朝の体操とはちがう。いきたくない子どもは学校に残り、自分の活動をつづける。

私は朝の集まりや体操をやらなければそれでいいとは思わない。子ども自身の活動を生み出す、大人とのゆっくりとした関係が作られることが大切と思うのである。幼稚園や学校の中で大人たちがきめた日課やカリキュラムが、子どもとゆっくりとつき合うのを妨げることもある。子どもが求めていることが何であるかが見えなくなるほどに、大人が自分できめたことにとらわれたら、教育が本末転倒する。

私は、子どもが大人との関係の中で自分から活動する自由を保証することが、幼児期にきわめて大切であることを長年の間見てきた。しかし、小学校でもその考えが通用するかどうか、八年前には自信がなかった。いま、小学校の時期も同様だということができる。養護学校だからではない。普通の学校でも同様だろうと思う。もちろん、子どもが違えば求めているものは違うから、普通学校だったら形態や内容は違ってくるだろう。けれども、子どもが自分から活動することを承認し、それにこたえてゆく大人との関係をつくることは、その後の時期でも同様だと思う。

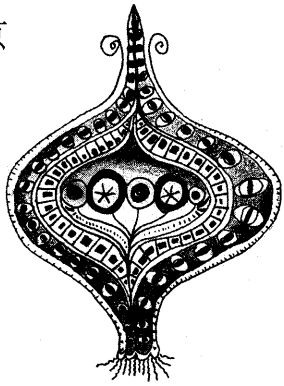
（愛育養護学校）



附属幼稚園の教育(5)

発達のとらえ方とそれをふまえた指導のあり方について　その2

村石　京



前号では附属幼稚園での教育の中で、発達についてのとらえ方の変遷と、現在の考え方について述べてきました。

現在附属幼稚園では、発達とは基準としてみるのではなく「個々の発達の過程」と考え、子ども一人ひとりの発達の道すじを大切にするという考えにたっています。それではこの考えのもとでは、実際の保育はどうあったらよいのでしょうか。現場の保育者としては、個々の子どもの発達を的確にとらえ、その子どもの今もとめていることを知り、それに合わせながらその子どもの伸びる方向づけをしていくこと、これが発達をふまえた指導のあり方というものであると考えます。

保育者は級の中の一人ひとりの状態を見て、そ

の子にとっては何が大切かを考えながら保育を行っていく、つまり個に合わせた対応の仕方をとっていくことが当然基本となります。一人ひとりの子どもの成長発達は一人ひとり異なったものですが、個の中には一つの道すじがあり、系統性があります。それは一人ひとり違うものであるので、基準とか水準とかいったとらえ方をすると、それにあてはまらない場合には水準よりおくれているとみては問題視したり、既定のわくに入らない子どもは不適応児といった見方をしたりしがちになります。

しかし、保育の中での考え方の視点を全く変えて、個々の子どもの夫々の発達の過程があり、それは個によって一人ずつ異なっているという考え方をするならば、今述べたような子どもの見方は起きないはずです。そして指導のあり方も当然一人ひとりの子どもに合わせた個別のものになるということになります。これが現在の私ども附属幼稚園での指導法であり、指導形態なのであります。

保育者はまずこの考え方を軸として、一人ひとりの子どもの姿を確実にとらえることからはじめます。その子どもの姿、その子どもの今もとめているもの、その子どものつきあたっているものなど、様々な側面を見ることによって、一人の子どもをトータルに構造的にとらえていくことが必要となります。そしてそれが私ども現場の人間の、現実に合わせて行っていく研究なのではないかと思います。その子どものトータルなものを知ることは、その子どものもつ「発達課題」をとらえていくことにもなります。

指導の場面では、個々の子どもの発達を促すような助言や援助を行っていくことが肝要となります。具体的には、その子どもの発達に合わせたもの、そしてその子どものもとめているものに合わせた状況をつくっていくことが大切となります。

例えば四歳児などはよくごっこ遊びを楽しんでやりますが、それも教師が活動として先だって与えるのではなく、子どもの側の要求や意欲に応じて教師が適切な環境を設定したり、助言をしたりして指導をしていくことがよく発達を促すことにもつながると考えます。あるいはまた、ある子どもが今ぶつかっている状況があるとします。例えば友だち間でトラブルを起こしがちな子どもは、自分をコントロールしていく力をどうやったらつくっていけるかとか、あるいは引っ込み思案な子どもは自分を充分に出し、のびやかに行動出来るようになるにはどうしたらよいかとか、あるいは受動的なことに満足している子どもが自分で考え、自分で伸びていくようになるにはどのような指導をしていったらよいかなど、現場からの例はつきませんが、とにかく幼児の全人的発達を促すための援助をしていくこと、これが指導なのであると考えています。

この考え方は一人ひとりの発達の過程が異なっているというところから出発したものですが、教育そのものも結局は個に合わせた指導となり、その子の発達に合わせた教育ということになります。当然実際の保育も級や年齢によるカリキュラムによって一せい的に行われるのではなく、一人ひとりに合わせたものとなってきます。幼稚園の生活の中で、子どもが教師やカリキュラムによって生活していくのではなく、私ども保育者が子どもに合わせ、子どものぞんでいるものに適合した生活を子どもと共につくっていくこと、これが一人ひとりを大切にする保育であり、個の発達に合わせた指導なのであると思います。

勿論、現実には子どもは級の中で生活しているわけですから、その子ども単独な存在ではなく、友だちとのかかわりの中で、あるいは級のメンバーの一人としての指導も大切なことはいうまでもありません。しかし根本は教師主導型の保育では

なくて、子どもが主体であり、私ども保育者は子どもに合わせていくという気持ちを忘れてはならないと思います。

実際の指導にあたっては、計画や材料を先に出すのではなく、子どもの遊びの中から生まれてきたものを適正にとらえ、伸ばし、実現していくことが出来るように助言したり、教材を提供したりしていくことが必要です。これを行っていくには保育者が自分自身の中に能力、資質、的確な判断力などをもつとともに、教材研究などを日頃から充分に行っていないと、その場その状況に応じた指導を行っていくことは難しく、大へんなことなのです。しかしあくまでも幼児の遊びの生活をくずすことなく、指導し、つまり保育者が全面に出て指導するのではなく、幼児の生活を支えつつ深めていくということを根本にもつことが大切なのだと考えます。

幼児の日常生活から生まれてくる活動は、瞬間的であったり、継続的であったり実に多様です。この日常の中で、個人の発達を大切にするという観点があり、その場その状況に適した指導をし、子どものもつ様々の可能性を充分にひき出していくというのが私ども保育者の役割であると思います。保育者は子どもの遊びの中にみられる様々な発達の可能性に注目し、大切にし、実現していくことが出来るように、助言、援助、指導をしていくことが、発達をふまえた指導というものであると考えます。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

緑蔭図書紹介

『親って何だろう』ベンジャミン・スポック　著（新潮文庫）
『大地の子エイラ』『恋をするエイラ』
『狩りをするエイラ』ジーン・アウル　作（評論社）
『お休みなさい、トムさん』ミシェル・マゴリアン　作

夏こそ、本を読もう

中村　妙子

夏休みって、子どもでなくてもうれしいものです。猛暑が続いたり、思いもしなかった用事が突発したりで、じっくり読書をする時間が取れないこともあるでしょうが、せめても普段読めずにいた本を読んでみることくらい、したいものですね。

そんなときのために、何冊かの本をご紹介してみます。

スポック博士って、覚えていらっしゃいます

か？　お子さんが小さいころ、『スポック博士の育児書』にお世話になったお母さま方もたくさん、いらっしゃると思います。あの本の原著がアメリカで出版されたのは第二次大戦後間もなくのことで、以来流れた四十余年の月日のあいだにアメリカの社会も、日本の社会も、目まぐるしい変化をとげました。

スポック博士もいまは八十八歳。でもまだ現役の感じで講演や著作に充実した毎日を送り、三十歳年下の夫人とヴァージン諸島でヨットでクルーズを楽しむこともあるとか。つい先ごろまで、核実験反対の市民運動にも加わっておられました。

スポック博士がつい三年前に出された**『親ってなんだろう』**という本があります。原題は“Parenting”といい、翻訳が新潮文庫に入っています。「働く母親」、「高年齢の親」、「しつけにおける父親の役割」、「継父の立場のむずかしさ」、「男女の平等をどう教えるか」など、おりにふれて親が戸惑ったり、考えこんだりする問題が平易明快に論じられています。

主として乳幼児から小学生を対象としていた「育児書」と違い、この本では思春期の少年少女達にも、多くのページが割かれており、著者自身、自分を侵入者と見なして白眼視するティーンエイジャーの義理の娘に手を焼いてカウンセリングを受けに行った次第なども率直に記されています。読書グループで取り上げて、話し合いの土台にしても面白いでしょう。

夏の読書に最適なのはジーン・アウル著**『大地の子エイラ』**、**『恋をするエイラ』**、**『狩りをするエイラ』**のシリーズ。評論社から出版されています。紀元前三万年という大昔の雄大な物語。氷の谷でのマンモス狩りなど、まさに清涼の気をはらんで暑気払いの効果満点です。エイラは原始時代の「おしん」という寸法でしょうか。

著者のアウルさんはいいます。

「新しいことを学び、ほかの人にそれを話すのは、わたしにとっていつも大きな喜びでした。わたしが科学に感じている魅力の一つは、あるものがどのようにして現在のものになったかということを理解する楽しさです。

そのころ、わたしはイラクのシャニダール洞窟の発掘にかんするソレッキの著書に興味を覚えていました。この洞窟で最初に発見されたネアンデルタール人の人骨化石は一方の肩が萎縮し、片腕が肘のところで切断されている老人のそれでした。わたしはそれを、ネアンデルタール人がきわめて人間らしい心情をもっていた証拠だと考えたのです。そのような障害をもつ男には、自分で狩りをすることなど、話のほかだったでしょう。しかも萎縮は、ごく早い時期からのものと思われました。誰かが彼を保護し、面倒を見たに違いありません。ネアンデルタール人は、彼らのうちの弱者を捨てて死に至らしめはしなかったのです。彼らには思いやりが、社会的良心があったのです。

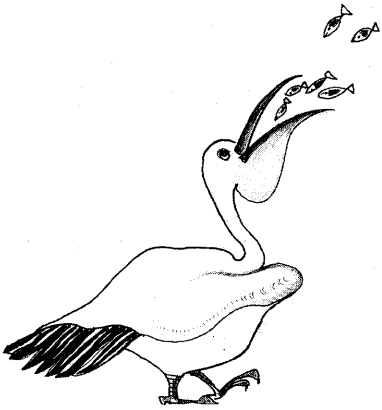
それがそもそもの始まりでした。大昔の化石に息を吹きこむには、知識が必要でした。当時の気候はどうだったでしょう？　動物は？　植物は？」

著者の好奇心、探究心から始まった小説。先史時代の話でありながら、人種差別の問題や両性の平等の問題、異民族間の理解の難しさなど、現代世界の切実な問題が取り上げられ、平和な二十一世紀にむけての著者の悲願も感じ取れるような気がします。

もう一冊。この本はいま印刷中で、出版はうっかりすると秋にずれこむかもしれないのですが、**『お休みなさい、トムさん』**という、イギリスの戦争中の物語をご紹介しておきます。珍しいことに、イギリスの疎開児童の話です。厳しい母親の

もとで喜びというものを知らなかった少年が、疎開先ではじめて暖かい愛情に囲まれ、友達もでき、やっと落ち着いたところで母親に呼び戻され、空襲下のロンドンでたいへんな経験をしますが、救い出されて大好きな養い親のトムさんと暮らすようになるという筋です。二人のほか、村のお医者さんや、同じ疎開仲間のユダヤ人の少年も生き生きと描かれ、イギリスの物語らしい重厚さとともに楽しい笑いもふんだんに振り撒かれています。原題は“Goodnight, Mr. Tom”といい、著者のミシェル・マゴリアンの作品が日本で紹介されるのはこの本が初めてだと思います。すぐれた児童図書に贈られるガーディアン賞を受賞しています。

（翻訳家）



『症状としての学校言説』　小浜逸郎　著（ＪＩＣＣ出版局）
『生活科の学習の成立と評価』　上越市立大手町小学校（日本教育新聞社）
『生活科の心理学』　無藤隆　著（初教出版）
『表情する世界＝共同主観性の心理学』　増山真緒子　著（新曜社）
『深呼吸の必要』　長田弘　著（晶文社）

無藤　隆

小浜さんの本はどれも、鋭いが丁寧な論述の中に、ユーモアや皮肉を交えていて、（自分が批判されるのでない限り）読んでいて楽しく、啓発される。いくつかの学校論、教育論も、生活する大人と子どもの感覚に届く議論を展開して、面白い。今回の本は、小・中・高の教育をめぐるいくつかの最近の有力な論を取りあげ、紹介しつつ、

せっかくの夏休み、読書でもという方に、明日から役立つ式のノウハウ本ではなく、保育から少し離れて見直すための本をいくつか挙げておきたい。いずれも、私が読んで、影響されたものである。

『症状としての学校言説』

批判している。例えば、教育技術の法則化運動とその批判。プロ教師論、など、肯定すべきところと否定すべきところを明晰に取り出している。

その論点に必ずしも賛成しない人でも、いろいろと有益な示唆を得ることだろう。少なくとも、記述の展開とともに、自らの考えを進め、自分なりの考えを作っていくのに役立つ。そこまで行かなくても、読んでいる間、思考を巡らす楽しさを覚えるに違いない。

小浜さんの議論では、結局、教育はある押し付けの要素を持つが、社会への適応として、また自分なりの仕事をする上で、ある程度やむを得ない。しかし、学校の比重は現行よりもっと軽くなってよいということになりそうだ。それをそのまま保育、幼稚園教育に持っていくことはできないが、しかし、関連はありそうでもある。どうであろうか。

『生活科の学習の成立と評価』

『生活科の心理学』

小浜さんの本と並べられるような本ではないが、現在変わろうとしている小学校教育について、やや理想面ではあるが、知るのに役立つ本として二冊挙げる。ともに、一年後に本格実施される小学校一・二年の生活科について、実践面と理論面とから解説したものである。幼稚園教育と小学校教育の接続を考える上で、このあたりを知ることは欠かせない。

上越市立大手町小学校は、（私はまだ見ていないが、）世間の評判では、最も実践的に進んでいるというところだ。大手町での実践記録が写真と共に詳しく出ているので、生活科がどのようなものかを直観的に把握しやすい。もう一冊は私の本で恐縮だが、薄い本で、生活科の理論的エッセンスをまとめてある。

『表情する世界＝共同主観性の心理学』

時間のあるときに、難しくてもよいから、人間とその発達の根本から考えてみたいという人に勧めたい。子どもにとっての（そして大人にとっての）世界が他者との関係の中で、情動的性質を帯びたものとして成り立っていることを、何人もの哲学者、心理学者がこれまで指摘してきた。そのことを、ここまで考え抜いて、しかも子どもの発達の事実と切り結びながら、論じた本はなかった。

言葉は、そのような表情を帯びた世界の中から、声の表情を豊かに表現するものとして生まれて来るのである。そのことは、保育を考え直し、例えば、保育内容「言葉」を基本から捉え直すのに、きわめて大事な出発点になる。

ただし、この本の記述は難解である。内容も難しいが、時に、記述が不必要にややこしいと感じられるところもある。「理論心理学」を名乗る以上は仕様がないのかも知れないし、新しい地点で初めから考え直すとそうならざるを得ないのかも知れない。いずれにせよ、読むには覚悟がいる。しかし、時々は難しい本を読んだ方が、頭の健康にはいいのではなかろうか。

『深呼吸の必要』

硬い本ばかりなので、一冊やや古いが、私の愛好する詩集を挙げておく。難しい本を読んで疲れたら、ひもとくのもよい。楽しいというだけでなく、「あのときかもしれない」という一連の詩では、子どもが大人になる過程を扱っていて、子どもや保育を考える上でのヒントを与えてくれる。しかし、詩集からまで仕事のヒントを得ようというのは、あまりにさもしいので、ゆったりとした時間の中で楽しむこと、いやむしろ読んでいく中でゆったりした時間を経験することで満足すべきなのだろう。

（お茶の水女子大学）

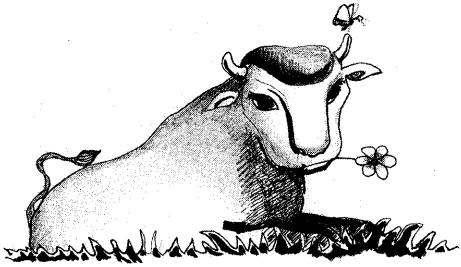
『食べることの思想』

戸井田道三　著（筑摩書房　一九八八）

森下みさ子

なにか考え事をしているとき、時として知らぬまに唇を触っている。そんなへんな癖に気付いたのは、少し前のことである。考えがまとまらない。うまく言葉にならない。「ああ、そうか。こういうことだ。」とわかる手前の、なんともおぼつかないフヤフヤした感じに漂いながら、なぜか唇を柔らかく刺激している。皮膚とも粘膜とも定めがたい、このあかいふたひらのものを刺激することが、思考をかたちづくることにつながるのだろうか。

そういえば、これに近い感じを、プディングをつくっているときに受けることがある。熱が加わるにしたがって、サラサラと形のなかった液体が次第にトロトロと固体に近付いていく。木べらか



ら指先に伝わってくるかすかな抵抗。ふつふつと泡立ちながら、形になろうとする液体が伝える微妙な抵抗感である。できあがったプディングは、形をなしてはいるものの少しゆらしただけでフルフルとふるえる。唇にもっていくと、かすかな摩擦を残しその奥に滑り込んでいく。離乳食か病人食に近いこのあやふやな感じは、思考が形をとりはじめ、言葉が生まれるときの瞬間を、食べ物として唇をとおして伝えているようにも思える。

思考がつかめたり、言葉が伝えられたりするのは、形があるからだ。それ以前は、どんな感じなのだろうと、唇を触りながら考えてみる。……もしかしたら、できかかったプディングのようなものではないだろうか。

＊

この本の著者は、それを赤ん坊のおしゃぶりにかんじとる。乳汁でおなかを満たすわけでもなくて、赤ん坊はよく乳首やおしゃぶりをしゃぶる。「しゃぶる」は、唇や舌の古語にあたるシハに「触(ふ)る」が付いてできた言葉であるという。唇や舌の刺激行為という点では、「しゃぶる」に近い言葉は「しゃべる」である。赤ん坊はしゃぶる行為をしつづけながら、片方ではしゃべりはじめる。ただし、この最初のおしゃべりは、まだはっきりした意味も形もなしていない。何かわけのわからない、言葉以前のコトバである。「しゃべる」は型以前であって、幼児が物をしゃぶることによって認識するような混沌をのみこんでいる。」

それなら、その混沌のなかから形が現れ、言葉が生まれ、ものごとがわかたれて「わかる」ようになるのは、どういう契機によるのだろう。著者は、おしゃぶりに残された小さな歯型を見落としはしない。しゃぶる行為は、やがて小さな歯が生えてくるにしたがって「噛む」行為を促すようになる。しゃぶるよりもより積極的なものへの取り組み。「おおげさにいえば子供の自我のめざめ」

であると、著者はそこに深い亀裂をみてとる。それは子供が自我なるものをたちあがらせる喜ばしい契機であり、同時に母と密着した共生状態から切れる悲しい体験でもあるのだ。著者は続けていう。「母親が『痛い』と叫んで乳首を子供の口から引き離す、と同時にその痛みに耐えることでしか子供は自我の芽ばえにあずかりえない」と……。乳首をとおして互いにわかちがたく快感を共有していた母親と赤ん坊は、痛さとそれに伴う拒否の動作によってわかたれる。入り込んできた「噛む」行為……それは型をつけることになり、同時にしゃべるは型化を経て、語る行為に結び付いていく。

著者は、これらのことを論理の積み上げによって述べているわけでない。実証的な例を連ねているわけでもない。ただ、赤ん坊の体の感覚にまでさかのぼってわかろうとする。その無垢な体感のなかから、人間存在の根源にある何か、構造ともいえるものが形を現してくる。すべての人間の根っこにあって、それだけに意識されないもの、そこに赤ん坊の感覚をもって入り込んでいこうとする。あえて名付ければ、意識が生まれてくる場を探ろうとする「胎生」学の方法といえるだろうか。「食べること」は、すべての人間に共通な体験であり、同時に様々な型を生むもとである。著者の胎生学のいざないは、それだけの迫力をもって根っこへとむかっている。

＊

この本は、長年能や狂言の研究にいそしみ、文学・芸能・民俗と、文化の型を思索の対象としてきた、ひとりの老学者の最晩年に書かれた。遺作ともとれる作品である。老人は限りなく赤ん坊に近付く。実際、八十に手が届かんとしていた著者は、文字どおり身をもって、人間が社会・文化の地平に形作られてくるときの道程を再認しえたのではないだろうか。饅頭や握り飯を対象に、みず

からが「しゃぶる」行為を繰り返してわかりえたことを、思想の言葉へと型化した。その歯型のなんと繊細であることか……。

（東京学芸大学非常勤講師）

ベンヤミン著作集12

『ベルリンの幼年時代』

ヴァルター・ベンヤミン　著

小寺昭二郎　編集解説（晶文社　一九八五）

彌永　信美

ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』という本を最初に教えてくれたのは、数年前のぼくの婚約者――すなわちいま、共に生活しているぼくの妻だった。これが婚約時代の幸せな記憶に深く結びついた本だということが、ぼくのなかでこの本に特別な意味を持たせているのを否定することはできない。しかし、こうした個人的な想いをはるかに越えたところに、この本の真の価値はある。

ショーレムの美しい友情に満ちた評伝『我が友ベンヤミン』（野村修訳、晶文社）によれば、ベンヤミンは、これを書いていた時――より正確には、ここに収められた『ベルリン年代記』を執筆

し、それをさらに「詩的・哲学的な構想」（ショーレム）に基づいて（同じくここに収められた）『一九〇〇年前後のベルリンにおける幼年時代』に練り直そうとしていた一九三三年四月から七月頃、スペイン東沖の地中海の小島、イビサに仮寓しており、経済的・精神的に絶望のどん底にありながら、たった一人で四十歳の誕生日を迎えていた。そしてその時、彼は自殺を決意していたという。これほど澄明な作品が、そこまで決定的に追い詰められた人間の頭脳から生み出されたということ自体が、ほとんど信じがたい奇跡としか言いようがない。――そうした作者自身の個人的な状況や想いさえも、はるかに越えたところに、この本の真の価値は存在する。

＊

ここに収録された二篇の作品には、両方とも「わが愛するシュテファンに」という献辞が付されている。シュテファンは当時十五歳――、ベンヤミンのただ一人の息子だった。その頃、ベンヤミンは長く困難な離婚訴訟の末、やっと妻ドーラと別れたところで、ドーラとシュテファンはナチの危険が迫るドイツに残っていた。この二篇のうち、特にイビサ島で書かれた『ベルリン年代記』は、四十歳を迎えて死を決意した一人の男が、会うことのできない息子に宛てて書いた一種の遺書にも似た性格を帯びていたことは事実だろう。が、この「遺書」は未完のまま中断され、その後、シュテファンへの献辞のほかに「おお狐色に焼けた凱旋記念塔よ／幼き日々の冬の砂糖をまぶされて」という、美しい謎めいたエピグラフが付された『一九〇〇年前後のベルリンにおける幼年時代』に姿を変えて、一九三三年から三八年にかけていくつかの新聞・雑誌に断続的に掲載されることになった。『幼年時代』は、『年代記』の素材の多くを使いながらさらに彫琢を加えたもので、ベンヤミンの多くの著作のなかでも、おそらく最

も美しい作品のひとつに違いない。

『ベルリンの幼年時代』は、表題からも想像されるとおり、「一九〇〇年前後」のベルリンで育ったベンヤミン自身の少年時代の思い出を核にして、「ティーアガルテン」、「皇帝パノラマ館」、「凱旋記念塔」などと題されたそれぞれ半ページから数ページ程度の四十たらずの「繊細なミニアチュア風の」（訳者・小寺昭次郎氏の解説）断章からなりたっている。といっても、これは単なる「幼き日々」のセンチメンタルな自伝とはほど遠い。――訳者の解説でも指摘されているように、これが、ベンヤミンが後半生の大部分をついやし、未完のまま終わった巨大な十九世紀論『パリの路地』の構想と深いかかわりをもっていたことは間違いない。この十九世紀パリ論は、もともと「近代資本主義の発展を、歴史的、社会学的に分析するための手がかり」（川村二郎氏による『ボードレール』への解説）として計画されたが、そのために集められた厖大な遺稿ノート集『十九世紀の首都・パリ』の目次に延々と並べられた、パリの高級服飾品店、パリのモード、人々の倦怠、都市計画、博覧会、蒐集家、鉄道、サン＝シモン、パノラマ、鏡、街頭照明、写真……などの項目を見ても明らかなとおり、近代都市を形作った様々な象徴的事物をめぐる、一種の万華鏡的な総覧になっていくはずのものだった。はじめて街に鉄道が通り、ガス灯の震える光りが夜の街頭を照らし、家々のインテリアとエクステリアに鏡が氾濫した時代。――こうした最も具体的な「物たち」が、ある時代の雰囲気を作り出し、人々の生活と思考を一変させ、世界の有様そのものを動かしていく。ベンヤミンの歴史感覚は、まさにこうした意味での「具体的事物の神話性」に最も敏感に反応した。しかも、彼が意図したのは、ただそれらの事物によって作り出された「近代」を外から批判することではなかった。むしろ、彼自身が

そうした「物たち」を偏愛する者のひとりとして、「物の神話」の奥底に沈潜し、そこから見えてくる彼自身の姿を凝視しようとしていたのではないか……。

ベンヤミンのこの特殊な歴史感覚、「近代」の事物への執着は、つまり十九世紀末にベルリンのユダヤ人の富豪の家に生まれた彼自身の出自を徹底的に問い直そうとする強烈な意志、情熱に支えられたものと言えるだろう。十九世紀パリ論は、そうした彼の個人的な出自からいったん離れて――あるいはそれを「パリ」という「外側」に対応させて、客観的に見直そうとする作業だったと考えることができる。逆に、『ベルリン年代記』と『ベルリンの幼年時代』では、ベンヤミンの視線は、まさに自分自身とその彼自身を作り出した世界に向かっている。それにもかかわらず、これらが互いに密接に関係していることは、たとえば『幼年時代』の「皇帝パノラマ館」の章とパリ論の「パノラマ」の章、あるいは『幼年時代』の（家族旅行について語る）「旅立ちと帰宅」の章と

パリ論における「鉄道」の章などが明確に対応しているのを見るだけでも明らかだろう。

＊

が、この「一九〇〇年前後のベルリン」が、彼自身に密着しているからこそ、彼はみずからをより徹底的に客観視しなければならない。『ベルリンの幼年時代』の文章から浮かび上がってくるのは、陳腐な表現によるなら、いわゆる「多感で繊細な」少年ベンヤミンの姿だが、そうした表現がまったく耐えがたく陳腐に感じられるほど、彼の筆は彼自身の少年時代から遠い距離を保っている。ここに語られているのは、たしかに彼が子ども時代に体験した様々な事件や感情の起伏だが、それを語ることばは、一度としてその子ども本人のことばではない――まさに最も洗練されたおとなのことばが、極めて感覚的な、時には官能的とさえ言えるような言語の技巧をつくして、この上なく微妙な子どもを描きあげていく。たとえて言うなら、『ゴールドベルク変奏曲』のアリアを弾き終えた瞬間、そっと右手を上げるグレン・グールド――のような、ことばのヴィルトゥオーゾ。グールドのピアノの響きが、あるいは一種の天上的な悲しみのようなものを覆い隠しているかもしれないのと同様、ベンヤミンのこの驚くべきことばの技巧は、ある痛々しい絶望を包むヴェールであるのかもしれない。が、この美しいことばの建造物は、そんな詮索も不躾なことと感じさせるほど、どこまでも清澄な光に輝いている。

一生の間、ほとんど花や瓶などの静物のみを描き続けたイタリアの画家ジョルジオ・モランディーのいくつかの奇跡的な絵画の前に立つと、人は、そこに描かれたもの（対象、「シニフィエ」）以前に、そこにある色の絵の具が置かれていることに打たれ、その絵の具そのものの美、その絵の具の存在の美に、心を奪われてしまう。（そう言えば、モランディーを最初に教えてくれ

たのもぼくの妻だった。二人で、あの限りなく静謐な絵の数々の前に立ち尽くした至福の瞬間――!)『ベルリンの幼年時代』のいくつかの断章に感じられる美も、まさにこれと同種のものなのだろう。ただ、そこに置かれているのは、絵の具ではなくことばである。ことばが指しているものや感情の美ではない。ことばの響きやその形ですらない。人はただ、それらのページに置かれた**ことばそのものの美**、**ことばの存在自体の美**に息を呑み、立ち尽くすほかない。――ぼくにとって、ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』とは、散文芸術の歴史のなかのひとつの恩寵の瞬間としか言いようがない。

(文筆業)

『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』

ロバート・フルガム　著／池央耿　訳（河出書房新社）

田代　和美

何でもみんなで分け合うこと。

ずるをしないこと。

人をぶたないこと。
使ったものはかならずもとのところに戻すこと。
ちらかしたら自分で後片づけをすること。
人のものに手を出さないこと。
誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。
食事の前には手を洗うこと。
トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。
焼きたてのクッキーと冷たいミルクは体にいい。
釣り合いの取れた生活をすること——毎日、少し勉強し、少し考え、少し絵を描き、歌い、踊り、遊び、そして少し働くこと。
毎日かならず昼寝をすること。
おもてに出るときには車に気をつけ、手をつないで、はなればなれにならないようにすること。

不思議だな、と思う気持ちを大切にすること。発泡スチロールのカップにまいた小さな種のことを忘れないように。種から芽が出て、根が伸びて、草花が育つ。どうしてそんなことが起きるのか、本当のところは誰も知らない。でも、人間だっておんなじだ。
金魚も、ハムスターも、二十日鼠も、発泡スチロールのカップにまいた小さな種さえも、いつかは死ぬ。人間も死から逃れることはできない。
ディックとジェーンを主人公にした子供の本で最初に覚えた言葉を思い出そう。何よりも大切な意味をもつ言葉。「見てごらん」

＊

人間として知っていなくてはならないことは、すべてのこのなかに何らかの形で触れてある、と著者は言う。このクレド（信条集）は本全体に漂っている。

子どもとかかわる人間として、私はいつも「何かをできるようにする」ことだけでなく、「子どもらしさを育てる」ことを大切にしたいと思う。そう思いながらも、大人の都合で子どもを小さな大人に仕立てようとしてしまうことがある。本の中の随所に出てくるフルガムと子どもたちとのやりとりは、子どもの持つ子どもらしさを大切に育てていくためには、大人が子どもらしさを持ち続けて円熟することが、何よりも必要だと私に語りかける。

心の豊かさというのは、どこか子どもらしいとしか言いようのないところがある。

花や虫を見つけて身体全体で喜んだり、地面に寝そべってアリやネコと語らったり、両手でカゴを作って大事そうにそうっと持ってきて「ほーら、お花。はい、ママにプレゼント」と言って〝見えないけどある花〟をうれしそうに持ってきてくれたり――こんな子どもらしさを大切に育てられる人間にとって必要な知恵が、すべてこの本の中にあるように思われる。

（お茶の水女子大学）

『静かな生活』

大江健三郎　著（講談社）

中村　弓子

大江氏のこの新作は、この欄ですでにご紹介した『新しき人よ目ざめよ』、『人生の親戚』に連なる、氏の実生活に根ざした一種の「家庭小説」である。しかしなんという「家庭小説」だろう！それは、大江氏という船長の壮大な思想的問いかけを発信しつつ、障害児イーヨーというどこに通じているかもわからぬとてつもないアンテナを載せて、時間と空間の果てしない拡がりを浮遊する宇宙船の物語であり、「形而上学的家庭小説」とでも呼ぶべきものである。

今回はこの宇宙船的家庭が、その乗組員の一人である氏のお嬢さんの視点から描かれるのだが、他ならぬ船長の大江氏自身がいま、生涯に何度という「ピンチ」にあり、小説はその「ピンチ」の物語となっている。

「ピンチ」の発端は、大江氏が実際にテレビで

行った「信仰を持たぬ者の祈り」と題する講演である。私自身もこれをテレビで見たが、幼年時代からすでに始まっていた信仰に対する関心と距離感の共存、そして障害児イーヨーの誕生が機会となった人間の「いのち」と世界の運命に対するやむにやまれぬ祈りについて語ったものであり、そこに吐露されているものの清冽な美しさが深い感動となって残る講演であった。

この講演はまた、ふと私にチャップリンの晩年の傑作『ライム・ライト』の忘れ難い一場面をも思い出させた。しがない老ピエロのチャップリンは、自分の才能に失望し生活にも行きづまって自殺未遂をした若いバレリーナを救い、心の病ゆえに動かなくなった足をも動かすことができるまでに回復させる。しかし、いよいよバレリーナとしてデビューという日、出番を前にして彼女は再び「足が動かない」と言う。彼女を平手打ちして舞台につき出したあと、老ピエロは跪き手を合わせて祈る。「神さま、あなたがいるのかいないのか私にはわかりませんが、どうかあの子を救ってやって下さい」と。

「自分のことを信仰のない者だとわざわざいいだす必要はないし、しかもそういっておいて祈りのことに言及しもするのは、誰に対してというのでもないけれど、確かに失礼なのじゃないか、と私は思う。そういうことをしてしまった以上、父にはいくらかの軽い罰があたえられても仕方がないはずだ」と、お嬢さんの口を通して「ピンチ」の由来がいくらか自嘲気味に語られてもいるのだが、大江氏の内的状態はたしかに、あの老ピエロの祈りに似たひたぶるな純粋さを持つと同時に、人間の尊厳に対するヒューマニズム的立場と、超越者に対する祈りとの間に引き裂かれている。この状態そのものがすでに本質的「ピンチ」なのである。

しかも、まるで悪いことは重なる、という具合

に、この「ピンチ」に加えるに、大江氏が幼年時代からひきずってきている二つの宿業ともいうべきもの（小説の中では、「積年の諸悪」とこれ又いささか自嘲気味な呼ばれ方をしているが）の意識が氏を襲う。それは「死の恐怖」の意識であり、「過大なエゴ」の意識である。「僕が子供の頃から恐しく感じていた、死とその後についての問題」、「来世がありさえすれば、そこが天国でも地獄でもいい、その両方ともまったくの虚無ほどには恐しくない」と言うほどの虚無に対する抑え難い恐怖。そして、「お前が頭の良い子だとチヤホヤされるうちに、誰かおまえよりほかの人間で、その人自身の命よりおまえの命が価値があると、そのように考えてくれる者が出てくるなどと、思ってはならない。それは人間のもっとも悪い堕落だ」と父親に言われていたその予言が大人になって当たっていると感じる恥辱。

しかし、この「ピンチ」の物語にも脱出口がかいま見えている。それはソ連のタルコフスキー監督の映画『案内人（ストーカー）』に登場する、世界を救う子なのかそれとも呪われた子なのかわからない女の子のエピソード、エンデの童話『モモ』の全世界を救う少女の物語をへて、『新しき人よめざめよ』でも取り上げられたブレイクの予言詩『ジェルサレム』に再び連なる脈絡に見出されるものである。それは『ジェルサレム』の次の一節に要約される。「イエスは答えられた、惧れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前は生きることができない。／しかし私が死ねば、私が再生する時はお前とともにある。／これが友情であり同胞愛である。それなしでは人間はない。／そのようにイエスが話された時／暗闇のなかを守護天使がちかづいて／かれらに影を投げかけた、そしてイエスはいった。このように永遠のなかでも人はふるまうのだ／ひとりは他の者がすべての罪から解きはなたれるように、許しによって。」それは無辜な

る者による救いと再生の同時的成就であり、換言するならば、キリストによる復活を信じることができるか、という問題にほかならない。

お嬢さんの視点を通して見てさえも、宇宙船大江号の生活は、表題のような『静かな生活』どころか、その船長である大江氏の内面にある深い動揺の気配を感じずにはいられない。それはまぎれもなくパスカルの言う「呻きながら求める人」のひとりである大江氏の「魂の闘い」の気配である。ランボーが「魂の闘いは戦場の闘いほどにむごたらしい」と言ったその「魂の闘い」の気配である。

しかし、それはあの聖アウグスチヌスが、人祖アダムとエヴァの原罪を、それが究極的には救い主の愛による贖罪をもたらす契機となったがゆえに「幸いなる罪過（フェリックス・クルパ）」と呼んだように、究極的には「幸いなる闘い」なのではないだろうか。氏の「ピンチ」は「幸いなるピンチ」なのではないだろうか。

そして、この点を含めて宇宙船大江号の命運そのものについて、この本のイーヨーの次の言葉は、いつものように飄々としたなかに本質的予言を含んでいるのではないだろうか。

「私はずっと楽観していました！」

（お茶の水女子大学）

『たのしく　たのしく　絵を描こう』

多田信作　著（黎明書房）

林　健造

今年から実施されている幼稚園教育要領では、絵を描くなどの造形活動は、領域「表現」の中で行われ、ねらいや内容が示されている。

表現では、豊かな感情を育てること、そのためにふさわしい環境を整えてやること、そして、子どもの発達の特性を大事にし、できるだけ子どもの主体的活動を重視していくことが述べられている。

幼児が何故幼稚園にやってくるのかを考えてみると、まず好きな人（先生）がいる。それと好きな友だちがいる、それから好きな楽しいことができるということであろう。絵を描く活動も、その中の大きな一つであろう。

主体的活動とは、何を描くのかという課題（描きたい内容）も、その方法も、そこからの発展も幼児自体から発動するような姿が最ものぞましいことであるが、つねに生き生きと自発的に活動するかというとそうではないことがある。

したがってあるときは、楽しい遊びや、材料やり方を教師の方から提示していく援助が必要な

時がある。これがすぎると、教師先導型・やらせの活動になる。

この問題の解決に、大変参考になる本が生まれた。それがこの多田さんが出版した『たのしく たのしく 絵を描こう』という本である。

多田さんは、八年にもわたり実践研究してきた造形活動の中から、とても幼児達が喜んで活動したテーマを〝水と友達になろう〟などの六つのジャンルに分け、幼児の発達や、系統性もよく考えてあり、きっかけのひきだし方や援助の仕方・活動の要点が一目でわかる解説・そこからの自然な発展などを、豊富なイラスト入りで大変わかりやすく示されている。幼児が喜びの中で造形遊びが充実していくことはもちろん、援助している教師の方も楽しくなるし、造形活動のコツを教えてくれる本で、保育関係の皆様にぜひおすすめしたい本である。

（十文字学園女子短期大学）

＜目次＞

Ⅰたのしくたのしく遊びながら絵を描こう
1絵を描くことは、絵と仲良しになることだ
2絵はどんなところにも描ける
3頭の中でも絵を描こう
Ⅱ水と友達になろう
1池の中でオタマジャクシは毎日なにをしているのかな
2大きな沼の中では

3 海の中を探けんしよう
4 魚はどんな洋服がすきなのか
5 水の中で球根を育ててみよう

Ⅲ まわりにある形と友達になろう
1 どんな自動車に乗ってみたいかな
2 動物の足あとをたどっていくと

Ⅳ 花や根っこや土と友達になろう
1 タネからどんな芽が？
2 一本の苗木から、どんな花が咲くのかな
3 太った根っこ、細い根っこ
4 どうしてスイカはまるくなるのかな
5 リンゴはどんな生活をしているのかな

Ⅴ 虫と友達になろう
1 アオムシくん達は野原でどんな遊びをしているのかな
2 野原の虫や小鳥達は歯をみがくのかな
3 バッタになって、たのしく遊ぼう
4 チョウにもきれいな洋服をきせてあげよう
5 カマキリにもきれいな洋服をきせてあげよう
6 アリくん達は毎日なにをしているのかな

Ⅵ 空をとぶ鳥や風船と友達になろう
1 小鳥になって空を散歩しよう
2 小鳥になって森を散歩しよう
3 ワシになって空をぐんぐんとんでみよう
4 風船が空にとんでいったら……

『あかちゃんの本箱』

原題 Babies Need Books

D・バトラー　著／横山真佐子　訳（ブック・グローブ社）

永田　桂子

表題が「あかちゃん…」とあるので、乳児、あるいは〇、一、二歳児の本のことかと思いますが、そうではありません。幼児期全般の本について書かれたものです。

第一章　なぜ絵本なのか、
第二章　〇歳児は…、
第三章　一歳になりました、
第四章　二歳になりました、
第五章　三歳になりました、
第六章　四歳になりました、

と年齢を追って乳幼児と本とのかかわりが大変わかりやすく解説してあります。

著者は『クシュラの奇跡』（のら社）をあらわしたドロシー・バトラーです。お読みになった方はご存じのように、彼女は現在ニュージーランド、オークランド市で児童書専門店を経営しています。自らの子育ての経験をふまえて、またクシュラを含めた孫たちとのふれあいを通じて、そして多くの母親の読書指導をするなかから、彼女が確信したことがらを丁寧に語っています。

内容の運びは、たとえば「平均的な二歳の子は、よく動きまわり、よくしゃべり、そして、一度こうと思ったら、なかなか決心を変えません。」と、まず発達特徴を述べることから始まります。

そして「二～三歳用の本には、現実にあり得る

状況の中で、実際に実現可能な行動を取るキャラクターたちが登場する、という形式が要求されています。」とその年齢の子どもの理解にあわせた、物語の一般的形式を述べ、具体論に移っていきます。ところどころに子どものエピソードを交えながら、それでいて主観に陥ることなく語られていきますから、絵本を研究しようと考えている人にはとても参考になるでしょう。もちろん、子どもにどんな本を選んだらよいのかしらと、現実的な情報を求めている人にも役立つ一冊です。

ドロシーは二～三歳の子どもに適したキャラクターとして、どろんこハリー、マリー、ガンピー、スモールなどをあげています。けれども、それらのシリーズ全部がよいというのではなく、なかには、この年齢にふさわしくないものがあると述べ、『まりーちゃんとひつじ』（フランソワーズ・文&絵・与田準一・訳／岩波書店）を例にあげます。

このお話は、マリーちゃんが羊のパタポンに「おまえは　いつか　こどもを　一ぴき　うむでしょう。そしたら…」「おまえは　こどもを　二ひき　うむかもしれないわ。そしたら…」と次々に想像をふくらませながら語りかける物語です。十匹まで想像していき、絵も文章に伴って七匹まで描かれていきます。ところが結末はたった一匹しか生まれませんでした。絵も七匹から急遽一匹になります。これを読んでもらったドロシーの三歳の長女は「他の小羊たちはどうなったの？」と困惑してしまったのです。もちろん一年後には、こうした困惑は消えうせていたそうです。

子どもと本の関係をみるには、子どもにその内容がわかるか（すなわち楽しめるか）という問題と、本が本そのものとしてすぐれたものかという問題の二つがあります。この二つをドロシーははっきりと分けてとらえ、それぞれを的確に論じています。その点が、ドロシー・バトラーのすば

らしいところです。

また、本を仲立ちにしたおとなと子どものやりとりに、こんなエピソードも紹介されています。二歳半の孫がドロシーの家にやってきました。絵本をプレゼントしたところ、孫はそれを大変気にいって、まわりの大人達に何回も読んで読んでとせがみます。それに閉口した両親は、帰るとき、わざと絵本を忘れていったのです。

これを、単にエピソードとして終わらせるのではなく、章を改めたところで、親へのアドバイスにつないでいくという巧みな理論展開もしています。

「…幼い子にとってひとつの作品にとことん溺れこんで、毎日毎夜その本を繰り返し読んでと、ねだるのはごく普通のことです。…(略)…こういう場合あなたがすべきことは、歯をくいしばって読み続けることだけです。…(略)…この時、その本は多分その子の一部となって入るのですから、あなたが反対すると、そのことを子どもは裏切りと、とるかもしれません。これほどその本に子どもが身を入れているなら、たとえその必要性や、それによる満足がおとなには全然理解できないにしても、大切なものなのです。」

その他、「判型の大きさも大切な要素です」と本の造りにふれたり、写真絵本や白黒絵本について、最初にすすめる昔話についてなど、絵本を考究するときにつきあたる初歩的な問題もとりあげて、彼女なりの見解を率直に述べています。

近年、絵本を語る本は多く、この五年の間に単行本だけでも三十五冊ほど出版されています。そのなかで最も説得力があり、すぐれた客観性をもって書かれている一冊がこの本です。一行一行がすべてウンウンとうなずきながら納得して読める本です。

(東京女子体育短期大学・武蔵野女子大学講師)

ジョン・バーニンガムの魅力1
『ガンピーさんのふなあそび』『なみにきをつけて、シャーリー』を中心に

高原　典子

子どもに、「今まで読んでもらった絵本の中で好きなものを選ぶとしたら、どれ？」と聞きましたら、中一のむすめは、「絵本て、まず絵が良くないと…『はらぺこあおむし』と『バーニンガムのちいさいえほん』、オールズバーグの『西風号の遭難』かな。」といい、五年生のむすこは、「まず『じごくのそうべえ』でしょ。それから『ガンピーさん』、『チムとゆうかんなせんちょうさん』」と答えました。そばで聞いていた父親は、とても満足そうにうなずきました。バーニンガムの絵本は父親自身が気に入って、クリスマスに、誕生日にと子どもた

ちに贈り、毎晩のように誘い合っては、ガンピーさんや犬のシンプ、ねずみのトラブロフなどの世界に遊んでいたからです。

私も時々その輪の中に入れてもらいましたが、子どものように読んでもらうことのなんとのん気で楽しかったこと！　心ゆくまで絵本の絵にひたることができました。なかでも「ガンピーさん」のシリーズには、読んでもらう度に、悲しい気持ちまで吹き飛ばしてくれるようなおおらかで温かな力を感じました。

今回は、その『ガンピーさんのふなあそび』と『なみにきをつけて、シャーリー』を中心に、バーニンガムの魅力を探っていきたいと思います。

○緑色の画面

『ガンピーさんのふなあそび』は、絵が先に、文章が後につけられただけあって、最初の場面で、主人公のガンピーさんの多くを語るのは絵の方です。いかにも人の善さそうな丸い顔、長ぐつをはき、大きなじょうろを持つ園芸家、もしくは農夫らしい風貌。次の場面では、ガンピーさんが舟を持っていること、家が川のそばにあることがわかります。

この絵本では、どの場面にもやわらかな緑色の草木がたくさん描かれていますが、とくにこの場面では、家も庭も川も舟も深い緑色に埋めつくされています。これはガンピーさんの生活が樹々と草原に囲まれた田園の中にあること、生活そのものも自然に根ざしたものであることを感じさせます。色彩心理学では、「緑色の中には現実的満足がある。黄と青が完全に平衡してそのどちらでもない単純な緑となるとき、感覚と感情はこの上に安らぎを見出す。それ以上に欲するなにものもない。」と捉えられますので、緑色におおわれた画面は、ガンピーさんの安定した世界を象徴し、読み手にも深々としたやすらぎを与えるわけです。そしてこの緑色の洗礼を受けてはじめて、ガンピーさんの世界に入ることができるのでしょう。

○左右画面のコントラスト

ある日、ガンピーさんは舟に乗って出かけます。すると男の子と女の子がやって来て、「一緒に連れてって」というのです。ガンピーさんは「いいとも、けんかさえしなけりゃね。」といって、二人を乗せます。舟は進み、次々に新しい仲間が現れます。これはロシアの昔話、「てぶくろ」や「おおきなかぶ」、日本の「ももたろう」などで登場人物が増えていく手法と同じです。

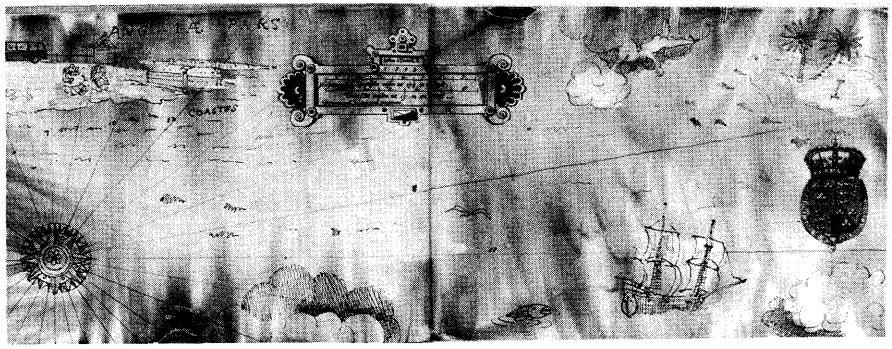
新しい仲間のうさぎ、ねこ、犬、ぶた、ひつじ、にわとり、牛、やぎなどは次々にスポットライトを浴び、彩色されて右ページに大きく登場しますが、彼らが舟に乗ったとたんにページは繰られ、舟も進むのです。そして文章としては表現されない舟の中のようすが左のページに、セピア色のペン画で示され、右ページの鮮やかさとは画風も異にして、あたかも光と影のように交互に描き分けられていきます。そのコントラストによって、新しい仲間の登場が強調され、見開きの画面は、左右それぞれが独立しており、左右では空間も時間もまったく違うことを明確に描き出すのです。

バーニンガムは『なみにきをつけて、シャーリー』でも、この手法を用いていますが、こちらでは、又、コントラストの意味が違っています。

シャーリーは両親と海辺へ出かけますが、まだ水が冷たくて泳げません。そこで両親は砂浜にデッキチェアーを広げ、シャーリーは岸辺に立って海を眺めます。以後、両親の現実的行動は左ページに、シャーリーの空想は右ページに描かれていきます。左ページで両親は思い思いに新聞を読んだり、編物をし、おかあさんはシャーリーに「くつをよごしちゃだめよ」とか「石を投げちゃだめ」などと母親らしい注意のことばを投げかけます。そのことばがページを繰るタイミングを作ると同時に、シャーリーが現実的にはどんな行動をしているかを示すのです。

シャーリーは外から見れば岸辺から海を見たり、海草を拾ったりという様子を示しながら、それらの行動を理由づけるまったく違う現実のまっただ中にいるのです。

つまり空想の世界では、犬と一緒にボートで海へ出ていくと海賊船に捕らえられそうになるが、勇敢に闘って地図を奪いとり、宝物を見つけて帰ってくるという大冒険をしているのです。外的現実における午後の数時間も、シャーリーの内的現実では、とっぷりと日が暮れるまでのはるかに長い時間にあたります。こうして左のページと右のページのコントラストが、おとなの時間と子どもの時間、外的現実と内的現実をみごとに描き出すのです。もちろん力強く鮮やかな画風で描かれているのは、シャーリーの空想の世界の方です。バーニンガムが現実と空想をどんな風に捉えているかは、見返し（図版1）を見るとよくわかります。現実は左上の岸辺にわずかな位置を占め、空想はその先の七つの海へと広がっています。位相的には現実さえもおおってしまうほどですし、時空を超えていくのです。でも空想の基盤となるのは海につれてきてくれた両親のいる陸地であり、帰っていくことのできる岸辺がなければ、空想は始まりもしない、そう物語っているようです。



▲図版1　『なみにきをつけて、シャーリー』（ほるぷ出版）より

こうして、バーニンガムは『ガンピーさんのふなあそび』と『なみにきをつけて、シャーリー』で、左右ページの画風をそれぞれ違え、時間や空間、あるいは現実と空想のコントラストを描くことによって、まさに絵で読み、絵で楽しむ絵本を生み出したのです。

○登場人物の視線

『ガンピーさんのふなあそび』の楽しさの大きな要素となっているのは、セピア一色の画面にあり、どちらかというと色鮮やかな右ページよりも左ページの方が饒舌のような気がします。

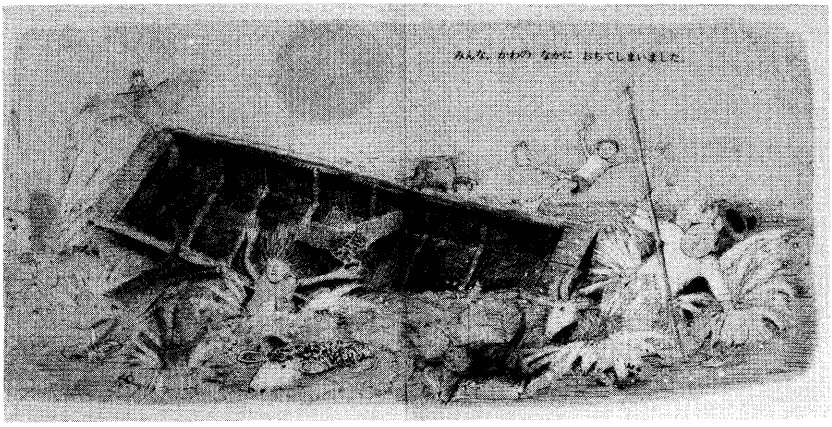
最初、ガンピーさん一人だった舟の上は、ページを追うごとに仲間が増えていき、舟の上は狭くなるはずなのに、皆、のびやかに思い思いに舟遊びを楽しむのです。ときどき川に手を入れたり、のんびりと足をのばしてみたり。でも舟がどんな位置にあっても、必ず舟の上のだれかは正面、つまり読み手の方を向いていますので、画面の中から手をふられたりすると、思わず手をふって応えたくなるような親しさを感じます。なかでもガンピーさんはほとんどの画面で人なつこそうな丸い顔を読み手の方に向けていますので、思わず「私も乗せて！」と声をかけたくなります。

松居直は『絵本とは何か』のなかで、ディック・ブルーナの『子どもがはじめてであう絵本』が親しみやすいひとつの要素として、「うさこちゃんが正面をきちんと向いていること」を挙げていますが、『ガンピーさんのふなあそび』の場合にも似たことがいえると思います。ファースト・ブックといわれるジャンルの絵本、たとえば『松谷みよ子あかちゃんの本』や『こぐまちゃんえほん』などでは、この画法がフルに活用されていますし、幼い読者を対象とする絵本ほど、登場人物が正面を向いている場面が多いのです。

逆に、ストーリーが複雑で、主人公や登場人物の内面を描く絵本、たとえばアーディゾーニの『チムとゆうかんなせんちょうさん』のシリーズやリンドグレーン文・ヴィークランド絵の『赤い目のドラゴン』などでは、ほ

とんど正面の画法は用いられず、後ろ姿も多くなり、読み手と登場人物の視線が合うことはあまりありません。でも、ストーリーの理解できる読み手ならば、登場人物の視線に合わせて絵本の奥深くをのぞきこむ形になり、我を忘れて主人公に同一化してしまうでしょう。そして感受性が強いほど、ストーリーから受けとるメッセージにも深いものがあると考えられます。

でも『ガンピーさんのふなあそび』は、むずかしいメッセージの託された絵本ではありません。むしろ絵を読むことのできる人ならだれでも、快い感覚にひたれる絵本でしょう。左右どちらかの画面で必ず、登場人物と読み手とが視線を交わせるような画法が用いられていることは、絵によってストーリーを読みとっていく幼い読者にとって、どれほど心強いことでしょうか。絵本の中と外でさえ、だれかと見つめ合えることは、うれしいもの。まして好きな登場人物となら、なおさらです。



▲図版 2　『ガンピーさんのふなあそび』（ほるぷ出版）より

○ガンピーさんの母性的側面

さて、ガンピーさんが最後にやぎを乗せてしばらくすると、舟はふくらみすぎた風船が割れるようにひっくり返り、みんな川の中に落ちてしまいます。（図版2）どんなに楽しくても舟の上でじっとしていることに耐えられなくなったみんなが、ガンピーさんに注意されたことも忘れ、暴れたりけんかを始めたりしたからです。

でも、このとき、ガンピーさんは怒りもしなければ小言をいいもしませんでした。みんなでお陽さまに当たって服を乾かし、野原を横切ってガンピーさんの家までお茶を飲みに行くのです。この一連の場面には、ちょうど画面中に描かれている太陽の光のように、ひときわ温かいガンピーさんの心が感じられます。

ユング派の分析心理学者、河合隼雄が『こころの天気図』の中で、『あしながおじさん』を例に挙げて、男性の中にも母性的な側面のあることについて論じていますが、このガンピーさんにも豊かな母性が感じられます。

▶図版3　『ガンピーさんのふなあそび』より

女性本来の大地的な母性とはひと味ちがい、水のように流動的な性質のもの、それはガンピーさんが水の上に舟を浮かべ、最たる流動性の持ち主である「子ども」を受け容れて、舵をとっていく姿（図版3）に象徴されているような気がします。舟はひっくり返るけれど、また新しい事態にも柔軟に応えていくのです。子どもの野性的なエネルギーの発露である「遊び」に充分に対応できるのは、多分に、ガンピーさんのように流動的な母性なのかもしれません。エッツの『もりのなか』で男の子を迎えにいくおとうさんも、リンドグレーンの『ロッタちゃんのひっこし』で家出した小さなロッタちゃんの気持ちを上手に受け容れ、おかあさんとの仲をとりなすおとうさんも、この流動的な母性的側面の持ち主なのではないでしょうか。

ガンピーさんは、いうまでもなくバーニンガムその人です。ヒッチコックが自作の映画に出演したように、バーニンガムもガンピーさんの帽子を脱いで登場するのです。それは作者のいたずら心のなせる技かもしれませんが、それだけガンピーさんに託した思いが強かったといえるのではないでしょうか。バーニンガムはかつてスラム街を明るくする仕事などもしてきて、「子どもを喜ばせる以外、自分には未来に確固たる野心はない。」という信条で絵本づくりにのぞんでいます。そうした「子ども」への深い愛情（まさにガンピーさんに投影された母性的側面！）が、この絵本の隅々にまで満ちていて、読者を豊かに活性化してくれるのです。それが、処女作『ボルカ』に次いでケイト・グリーナウェイ賞を獲得したのも当然なことといえましょう。

掲出図書

○ジョン・バーニンガムさく／みつよしなつや訳
『ガンピーさんのふなあそび』（ほるぷ出版）
『ガンピーさんのドライブ』（ほるぷ出版）
○ジョン・バーニンガムさく／へんみまさなお訳
『なみにきをつけて、シャーリー』（ほるぷ出版）
○ジョン・バーニンガムさく／谷川俊太郎やく

『バーニンガムのちいさいえほん』全八冊（冨山房）

＊

○エリック・カール作／もりひさし訳
『はらぺこあおむし』（偕成社）
○C・Vオールズバーグ絵と文／村上春樹やく
『西風号の遭難』（河出書房新社）
○田島征彦さく／桂米朝・上方落語・地獄八景より
『じごくのそうべえ』（童心社）
○エドワード・アーディゾーニ作／瀬田貞二やく
『チムとゆうかんなせんちょうさん』（福音館）
○ディック・ブルーナ作・画／石井桃子やく
『子どもがはじめてであう絵本』全十二冊（福音館）
○松谷みよ子ぶん／瀬川康男ほか絵
『松谷みよ子あかちゃんの本』全四冊（童心社）
○森比左志・和田義臣ぶん／若山憲え
『こぐまちゃんえほん』全十五冊（こぐま社）
○リンドグレーン文／ヴィークランド絵／ヤンソン由美子やく
『赤い目のドラゴン』（岩波書店）
○マリー・ホール・エッツ作・画／間崎ルリ子訳
『もりのなか』（福音館）
○リンドグレーン作／山室静訳
『ロッタちゃんのひっこし』（偕成社）

引用文献

○金子隆芳著『色彩心理学』（岩波新書）
○松居直著『絵本とは何か』（日本エディタースクール出版部）
○河合隼雄著『こころの天気図』（毎日新聞社）

（小田原女子短期大学）

ある日の育児日記から (8)

佐藤　和代

この一か月、我が家は大騒ぎでした。原因は娘の圭のとびひ。虫さされが化膿して、おなかの半分くらいに広がってしまったのです。

本人はかゆがるだけでいたって元気。でも、うつる病気なので保育園には行けません。そして、これが治るまで何と三週間！

運悪く、敬（主人です）は九州に少し長めの出張中。私は仕事を休めるだけ休み、家でできるものは持ち帰りましたが、ちょうど忙しい時期。どうしても休めない日だけは、子連れ出勤をしてしまいました。

幸い、圭は緊張していたせいかどこでもおとなしく、あまり迷惑をかけることもありませんでした。

それでも、子連れでラッシュの電車に乗り、都心へ出るだけで重労働です。夜、圭が寝てから仕事をしようと思っても、添い寝をしているうち一緒に眠ってしまい、朝あわてることもしばしば。何年か前、アグネス論争というのがありましたが、子連れ出勤の賛否はともかく、アグネスは運転手つきの車で出勤したのでしょうね…。

ところで、圭の遊びのレパートリーがひとつ増えました。書類を持って電車に乗る「かいしゃごっこ」。…二歳の子がする遊びかなあ、これが。

祐子三歳　独立のイメージ
――私、おねえちゃんです――

小薗江　幸子

私達夫婦にとっての第二子が一昨年の十二月三十日に誕生しました。長女の祐子が一月二日生まれですので、ちょうど三歳違いの姉弟ということになります。私のお腹がふくらみ始めたのが、ちょうど祐子が二歳半頃のことです。祐子の時と同様、子宮口の筋無力症のために、五か月の時に縫縮の手術をしましたから、出産まで安静が必要で、祐子を抱き上げたり、一緒に走ったりとんだりすることはできませんでした。散歩や買物の帰り道、歩きつかれて、「どうしてお母さんはだっこやおんぶをしてくれなくなったの？」と言われ、「ポンポの赤ちゃんが元気に生まれてくるように大事〳〵しないといけないのよ。」と説明しましたが、二歳半を過ぎているのに、ついついベビーカーに頼ってしまったことも事

実でした。

ただ、お腹の赤ちゃんの存在が、祐子の望み（だっこしてほしい、かけっこしてほしい）を、直接制限しているのだという印象を与えることは避けたかったので、「赤ちゃんは、祐子の三歳の誕生日のあとにすぐ生まれるのよ。生まれたら、すきなだけ、だっこもおんぶもピョンピョンもできるのよ。楽しみね。」と、弟妹の誕生をプラスのイメージとして持てるように気をつけてきました。

その年のクリスマスのプレゼントは、『うさこのサンタクロース』（作・矢崎節夫）という、我家のタイミングにぴったりかなった絵本をみつけてきて読みきかせたのですが、祐子はあまりパッとしない顔で聞いており、「あまりおもしろくない」と申しましたのには、がっかりしました。うさぎの女の子が、クリスマスプレゼントに赤ちゃんがほしいとサンタさんにお願いするのですが、動物のサンタさん全員の知恵をあわせても願いをかなえてあげることができずに困っているところへ、女の子のお母さんが、「もう少し待っていらっしゃい、じきにプレゼントできるのよ」ということで解決するすてきなお話なのです。三歳直前の祐子にとって、「赤ちゃんが生まれると嬉しい」というような感情は、想像できなかったのかもしれません。実は、私自身も、第一子の祐子が胎内にいるうちは、赤ちゃんがかわいいという感情をなかなか持つことができず、「自分には母性愛が欠如しているのではないか、はたして母親になる資質が備わっているだろうか」と不安だったことが思いおこされます。出産して、新生児と対面し、腕に抱いて、乳を飲ませて、笑顔がみられるようになってやっとかわいいと思えるようになった自分自身の母親としての成長のゆっくりさを思うとき、祐子が、姉になることを良く理解できない、というより想像できなかったとしても、無理のないことだったかもしれません。祐子は、時おり、知人に、「もうすぐお姉さんになるのね、いいわ

ね、うれしいでしょう？　とたずねられても、全く困りきった表情をし、お返事ができないのでした。

出産前に、これだけはわかっておいてもらいたいと、真剣に彼女に語り聞かせておいたことがあります。それは、

「赤ちゃんが生まれて、よその人が、どんなに『かわいい赤ちゃんね、赤ちゃんかわいい、かわいい』なんて言っても、祐子は、ずっとずっとお父さんとお母さんの宝物で、赤ちゃんの方が、祐子よりかわいくなっちゃうということはないのよ。だから心配にならないようにね。」ということです。これについては、「よくわかった。」と、納得した様子でした。

さて、祐子の三歳の誕生日がすぎてから、プレゼントとして生まれるはずだった第二子は、予定よりも一週間早く、十二月三十日の朝、超安産で生まれました。二十九日の夜、絵本を読みきかせられながら眠ったはずの祐子は、次の日の朝には、母親は病院に行ってしまっており、父親と朝飯を食べて、母に面会に来たときには、すでにお姉さんになっていたという訳です。

産後の五日間の私の入院期間を、祐子は、毎日病院に面会に来ることを楽しみに父親とすごしたということです。毎日の忙しい生活の中で、意識的に祐子とかかわりを持ち、細かい世話も、ほとんど何でもできるという父親の日ごろの努力が、祐子にそれほどきびしい思いをさせずに、すごすことができ、無事退院の日をむかえることができました。

退院の日、晴れ〳〵とした表情で祐子は母親と手をつなぎ、新生児の章博は、父親にだっこされて帰宅しました。その父親が、章博をだっこしたまま、家にはいろうとした時、祐子は、

「赤ちゃんのお母さんは誰なの。赤ちゃんのお父さんは祐子のお父さんなの？」とたずねたそうです。父親は、とっさにどう答えたものか迷ったそうですが、「そのとおりだよ。とてもよくわかった

ね。」と言ったそうです。今まで、ひとり娘として、父母の愛情を独占してきた祐子にとって、弟と、父母の愛情を分け合っていかねばならないらしいという考えが、赤ん坊を目のあたりにして初めて現実のものとなってきたようです。

章博を加えての新生活が、いよいよ始まりました。産後の私にとって、章博の授乳とオムツ、祐子の世話と最低限の家事をするのが精一杯でした。産後の手伝いに来てくれていた私の母が、後日談で、産後の私が「祐子を抱っこしてやることが少なくて心配になった。そのかわりに、祐子の父親は帰宅するなり祐子をだきあげ、体を動かして一緒に遊ぶように努めていたのが印象的だった。」というのです。私としては、退院して以来、まず、妊娠前の母親の姿にもどろうと努めていたつもりでしたので、そのことばはとても意外でした。努めているつもりでも、やはり赤ん坊に手も心もとられてしまっていたのだと思います。

幸いなことに、祐子が眠りにつく時刻と、章博の授乳の時間が重ならなかったので、毎晩、祐子の好きな絵本の読みきかせだけは続けることができました。その時間は、章博を父親の手に委ね、祐子だけの母親として眠りにつくまでの時間をすごしました。一階の居間に弟と父親を残して、二階の寝間まで母親の手を引っ張っていく時の祐子の満足そうな表情は、私にとっても嬉しいものでした。

二人の子どもを育てる上で、私が考えたことと言えば、祐子に、弟が生まれたことで、淋しい思いをしたり、つらい思いをさせることをできるだけ少なくしたいということだけです。弟が生まれたということが、嬉しい印象、快い印象に結びついていけば、弟をかわいがる気持ちも育っていくのではないかと期待しました。従って、「お姉さん」ということばは、肯定的イメージを与える時だけ使う、つまり、「お姉さんだから、〇〇せねばならない、我慢すべし。」というような時は使わないようにし、「お

姉さんだからできたのね、さすがにお姉さんは我慢強いのね。」という具合です。このことについては両親の間ではほぼ合意がありましたが、それ以外の親戚やら知人からは別のことばかけも多々あります。しかし、両親と過ごす時間が長いですから影響はほとんどないように思います。

また、章博をあやしたり、抱いたりする時はできるだけ祐子もともに関わって、ともにかわいさを楽しむようにしていました。生まれた時から、両親の愛情と注目を独占してきた祐子にくらべ、第二子の章博はなんと不憫だろうという気持ちがないわけではありません。けれどもこれが第二子のさけて通れない現実ならば、姉からの愛情も受けられるようにもっていけば、少しは補いもつくのではないかと割り切らざるを得なかったのです。四月からは、祐子の三年保育への入園も決まっていましたから、それ以降は、章博と私だけの時間を持つこともでき、濃密な母子関係づくりはそれから埋め合わせて補っていこうというわけです。

祐子が、四月から幼稚園に通いはじめ、章博も生後三か月と過ぎて、よく声をたてて笑ったり、はしゃぐような表情もみえるようになりました。初め

ての園生活で、それなりに緊張もあったろうと思うのですが、章博をベビーカーにのせて迎えにいきますと、祐子は通園路の途中から自分もベビーカーにのりこんで章博を自分のほうにむかせ、「イナイイ〈バァ」と繰り返しやってみせながら、章博をあやして笑わせようとしているのでした。あたかも章博を笑わせることで自分がくつろげる、ホッとした気分になれるという風でした。祐子は、自分が乳児の時に最も好きだったイナイイナイバァを、章博に対してもよく使います。それと「おねえちゃんよ、おねえちゃんよ。」と「おねえちゃん」ということばを繰り返し耳から聞かせて、教えこみます。「おねえちゃん！」といつか言ってくれるのがとても楽しみなのだそうです。私としては、姉弟は上下の関係をつけずに、ユウコちゃん、アキちゃんとでも平等に名前で呼び合うように育てていきたいと思っていたのですが、祐子としては、ぜひとも「おねえちゃん」と呼んでもらいたいのだそうです。祐子に、章博の世話を手伝ってもらう間は、それも仕方のないことのようにも思います。

章博の表情が豊かになってきて愛らしさも増してきた夏頃、こんなこともありました。私が章博と向き合って「イナイ〈バァ」と遊び、「おいでおいで」と手まねきをしているのを見て、祐子は、「私のことはもうかわいくないの？」

また、同じ頃、私のひざの上にどしんと乗っかってきた祐子に「わあ、重い、痛かったなあ。」と悲鳴をあげると、祐子は、「祐ちゃんがあまり大きくなったから、もうだっこはしてもらえないの？」あまりの悲しそうな顔に、胸がつかれるものを覚えました。

兄弟げんかの芽も、章博が七か月すぎて両手が自由に使えるようになってきた頃から見られるようになりました。「これはおねえちゃんのだいじなものよ。さわっちゃだめ！」「おねえちゃんのこと大好きだからおねえちゃんのものをさわってみたいんだ

よね。」そこで祐子は別のおもちゃを章博の手にもたせて気をそらせることを覚えたり、章博にじゃまされたくない遊びをするときは、二階に行ってやるか、台所のダイニングテーブルの上ですることにして、無用のトラブルはできるだけ少なくしたいとは思っているのですが…。

また、章博が十か月をすぎ、よく歩きまわるようになると、祐子は、私とは違ったやり方で、弟と遊ぶようにもなりました。章博が何か嬉しそうな顔、楽しそうな表情をしたとき、祐子は章博に顔を寄せるようにして、ニコニコと笑ってみせます。すると章博も負けずにニコニコと笑い返すのです。次に祐子が声をたててケタケタという風に笑ってみせると、章博も全く同じようにケタケタと嬉しそうに笑うのです。そのように他愛のないことを何度もくり返して、まるで気持ちが通じあうことを確かめてでもいる様子です。章博の歩行がよくできるようになってくると、テーブル等のまわりを、笑い声をあげながら、ぐるぐるまわる遊びが、もっとも興にのったようでした。ちょうど二歳位の時、祐子は公園で出会った同年齢の子どもと、友だちになれそうだなと感じた時には、相手と同じ動作をしたり、おいかけて歩いて、気持ちをつなげることを体で覚えたという話を、一年前に本誌に書かせていただきました。今、このようなやり方で、小さい弟と心をつなげる遊びをしてみせてくれる祐子をみていると、あの頃、公園で、少し年上のお友だちから関わってもらった仕方、友だちになり方、心のつなげ方の技術といってもよいようなものが、祐子の人間関係づくりにとって、大変にすばらしい財産になっているのだということを、再確認させられています。

「章博がもう少しおにいちゃんになったら、絵本をたくさん読んであげるからね。」小さい時に自分が好きだったことを、今度は弟にしてやれるということが、祐子には楽しみでたまらない様子です。弟が生まれるまでの三年間は、両親の愛情を一身にう

けるだけですごし、公園での出会いでも、ちょっと年齢の多いお友だちにかかわってもらって、心をつなげるようになってこられた祐子が、今、四歳を目前にして、弟の章博に、子どもと子どもの心のつなげ方を伝えている―。人間の営みというのはなんてすばらしいのでしょう。幼い者たちのこのような姿を見せてもらいながらすごせることを、保育にあたる母親として至上の幸福だと思っています。

祐子の幼稚園生活についてあまりふれることができませんでしたが、たいへん温かく子ども達の育みを助け、見守ってくださる先生方と園長先生が、まさに思いやりと意欲を大切に、園生活をすすめてくださっていることを忘れてはいけないと思います。

この一年間、祐子は四歳児として、幼稚園での生活も充実し、いろいろな面で、やってみたいこともたくさん出てくるのではないかと思います。ピアノや、バレエや水泳にと、忙しく習い事に通うお友だちもふえることでしょう。しかし、私は、できることなら、低いレベルでいいから、家族のもっている文化的な内容や技術を出しあって、家庭の文化面を家族でつくっていくような楽しみ方ができたらいいと思っています。しかし、机上の空論でしかありません。

ともかく、小さい章博が我家に来てくれたことで、こんなに祐子もおとなも豊かに育ってきたことを感謝してペンをおきたいと思います。

（はるにれの会）

八月号は、恒例となりました図書紹介の特集です。保育や心理学の専門書から児童文学、文芸書、教養書と、幅広いジャンルの本を紹介していただきました。日頃、子ども達の保育のことでいっぱいの頭に、夏の木陰の涼風をおくり、のんびりと、読書を楽しんで下さい。

＊

先日、空地の草刈りをしました。日頃手入れをしていないので、雑草がのび放題です。こんな雑然と生えている雑草もよく見ると、面白い分布？　で生えています。斜面側は、よもぎ、ふき、笹、萩、と刈り取ってしまうにはもったいない草が生えています。内側に入るにつれて、すすき、あわだち草、大たんぽぽや名前も知らない本当の雑草ばかりです。この土地は、以前山だった所を宅地造成したために、斜面側には、山肌に生えていた野草がそのまま残って生えてきたようです。風に運ばれてきた雑草にまぎれて、こんな所に山の名残りを残すなんて、自然は逞しく可愛いものです。

六月号の特集で書いていただいた徳野雅仁先生の『私の一坪菜園』（徳間書店）によると、〝雑草は畑作りの頼りになる味方〟だそうです。根をはって土を耕してくれたり、土の乾燥を防ぎ、土の温度が上がりすぎるのもおさえます。徳野先生は「畑の雑草を刈るのは、真夏の七、八月頃だけです。苗よりも背が高くなると日が当たらなくなるから。それも根っこからぬくのではなく、根元を刈り取りその場においておくのがいいんです。なまけ者でいいんですよ。」とやさしく話して下さいました。

ともあれ、私の草刈りの方は、「畑作り」をしている訳ではないので、草には申し訳ないけれど、御近所の迷惑にならないよう、早くきれいに刈り取ってしまわなくては……。すみかを刈り取られておどろいてとび出してきたバッタやカマキリに「ごめんね！」といいながら、草刈りを終えました。

（K）

幼児の教育　第九十巻　第八号
（一九九一年八月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

平成三年八月一日　発行

編集兼発行人　本田和子

発行所　日本幼稚園協会
東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社
東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館
東京都千代田区神田小川町三―一
振替口座　東京九―一九六四〇
電話　〇三―三二九二―七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。
●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの生活と遊びの姿をまとめた保育デザイン集!!園だより・クラスだよりに環境構成・誕生会等おまかせください。

保育に必要なデザインを月毎に分け、各月とも子どもの生活・環境・行事・おしらせ・誕生会・お誕生カードの６項目を取りあげてパターン化してあるため、年間を通していつでも必要なイラストのある場所が明確で簡単に取りだせるよう配慮され、また、コピーが簡単にとれるような工夫もあり使いやすくなっています。イラストの他に各見開きには、保育のヒントの一口メモがついていて保育アイデアの参考になります。

あべ　めぐむ・たじまじろう　共著

Ｂ５判・120頁・定価各1,700円(税込)

セット定価5,100円(税込)

園生活を豊かにする

保育デザイン①

4・5・6・7月

4月～7月までの各月の保育業務に必要なイラストをまとめたものです。主なテーマは、新学期の新入園児・進級園児の姿、梅雨期の遊び、七夕まつりで、資料として暑中見舞、シンボルマークなどをとりあげてあります。

園生活を豊かにする

保育デザイン②

8・9・10・11月

8月～11月までの毎月の保育業務に必要なイラストをまとめたものです。主なテーマは、水遊び、プール遊び、自然とのかかわり、運動会などです。資料として運動会の表彰状・参加賞・ペンダントの他に運動会・遠足・お店やさんのポスターやカットをとりあげてあります。

園生活を豊かにする

保育デザイン③

12・1・2・3月

12月～3月までの毎月の保育業務に必要なイラストをまとめたものです。主なテーマは、クリスマス・お正月の行事、春、卒園などをとりあげ、資料として劇遊びのお面、年賀状、わらべ歌のカットなどをとりあげてあります。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

●第5巻
新刊 とり
監修／東邦大学理学部　長谷川　博

●第1巻
こんちゅう㊟
監修／前東京都多摩動物公園 園長　矢島　稔

●第2巻　第25回造本装幀コンクール賞受賞
どうぶつ㊐㊟
監修／東京都多摩動物公園 園長　増井光子

●第3巻
しょくぶつ㊟
監修／園芸研究家　浅山英一

●第4巻
みずのいきもの㊐㊟
監修／国立科学博物館　武田正倫

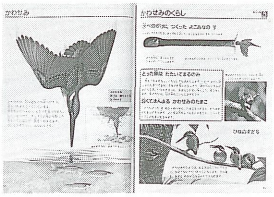
㊐日本図書館協会選定図書
㊟全国学校図書館協議会選定図書

監修／東京大学名誉教授
水野丈夫

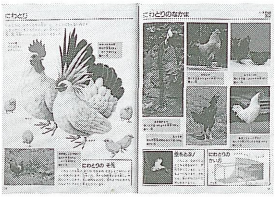
幼児の探究心を育てる図鑑
小学校の「生活科」にも役立つ。

ふしぎがわかる
しぜん図鑑

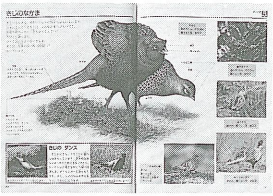
調べる、確める、
知ることが
楽しくなる
美しいイラストと
豊富な写真。



写真よりも詳しくわかるスーパーリアリズム・イラストのワイド画面。自然界への興味や関心を高めます。動植物のふしぎさやおもしろさが、ワイドにせまってきます。



なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える画面。豊富で美しいイラストと写真の組み合わせで、わかりやすい構成は、子どもたちのさまざまな疑問に答えてくれます。



基本的な図鑑として十分に活用できる豊富な情報。子どもたちにとって新しい発見もたくさん用意しました。子どもたちに探究心や科学する心が育つように、応援します。

Ａ４判・上製本・本文116頁・定価各2,000円(税込)・セット定価10,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館